

はしがき

日本の近世社会は大開発の時代であった。大規模な用水が引かれ、新たな土地が開削された。人々は開発により大きな恩恵を受けたが、一方では人為的に改変された自然により、洪水は起こり、山は崩れ、命までも奪われることもあった。

また、この時代、現在に繋がるような都市が各地に築かれ、多くの人たちは都市に集まり暮らすようになった。東京、大阪、名古屋など現在の日本を代表する大都市の多くも、近世が起点となり巨大化の契機を得た。現在、東京の人口は一〇〇〇万人を超え、先に挙げた都市の人口も数百万人を擁する。近世において、人口が一〇〇万人を超えたとされるのは江戸のみであるが、大坂や京都では数十万人を数え、他の地方都市でも数万人を抱えた。さらに、現在の県庁所在地になるような多くの都市も、この時代を一つの画期として現代に繋がっていくと言つていいだろう。人間の手による大地の大規模な開発が行われたのであった。

これらの都市の大部分は、近世社会において城下町として発展し、城郭を中心に武士が集まり、それを支えるために町人たちが居住し、多様な集団が生活を営んだ。町人たちが、城下の武士の生活を支えていた。その町人たちを束ねたのが町役人であった。町役人の出自の多くは、戦国大名の御用商人など

とされ、経済力を背景に政治的な力を握っていたと考えられる。彼らが、城下町を中心とした経済圏を作り、近世的な体制を整えたとされる。

しかし、近世も時代を下ると、城下町においても新興の商人が登場し、近世初頭から町役人を担っていたような町人たちは経済的に凌駕される場面が多くなる。こうなると、新興勢力に力を奪われ、旧来の勢力は完璧に排除されてしまうのだろうか。

その答えは否である。従来の町役人たちの多くは生き続け、町政において一定の役割を果たしていた。近世初期から幕末、さらには近代になるまで町役人として続いた家は各地に数多確認でき、簡単にその名前を挙げる事ができよう。新興勢力の登場により、町政に及ぼす影響力は少なくなることが想定できようが、これまでの町役人たちは表舞台から一挙に退場するのではなく、町政を担い続ける。見方を変えれば、近世初頭のように個人の力に頼るのではなく、世襲されていくなかで、その職掌が定まり、安定的な力を町役人として発揮できるようになったとも評価できるかもしれない。ただ淘汰される存在ではない。

このように見ていくと、都市の時代である近世において町役人を中世から近世、近代まで通して考えていく必要が浮かび上がってくる。そこで、本書では、甲斐国の甲府町年寄を代々務めたとされる坂田家を取り上げ、近世社会において町役人が世襲されていった意味について考えていきたい。現在の都市に繋がる、都市の歴史的な段階の一つが明らかになるであろう。坂田家は、戦国大名武田信玄の甲斐国領有下の甲府城下町において中心的な町人であったとされ、近世を通して甲府の代表的な町人の家の一つであったとされる。甲府の惣町を管轄する町役人である甲府町年寄を歴代にわたって担った家で

あった。近代には区長・戸長なども務め、中世から、近世、そして近代まで見通せる存在である。

本書の分析対象となる坂田家には、信玄の朱印状をはじめとする膨大な史料が伝えられている。山梨県の指定文化財でもある坂田家文書の特徴の一つとして挙げられるのが、御用日記などの帳面類が多数残存していることである。一七世紀の半ばから、約二〇〇年に渡って残されており、その冊数は、数百冊に及ぶ。これらの史料の残存状況は近世の町方文書においては稀有なものである。斯くの如き史料を全面的に駆使し、中世から近世、近代へと続いた町役人の歴史的な位置を明らかにする。そこから新たな近世社会が描けることになる。都市の時代としての近世の新たな姿となろう。

SAMPLE

目次

はしがき……………(1)

序 章 近世都市史研究の課題と本書の構成……………1

はじめに……………1

第一節 近世都市史研究の現在……………3

第二節 町役人の研究をめぐって……………8

第三節 分析対象の概観……………11

第四節 本書の構成……………22

第一章 町役人の系譜——坂田忠家と甲府町年寄……………29

はじめに……………29

第一節 一七世紀後半の甲府と甲府町年寄……………31

第二節 甲府町年寄の盛衰……………35

第三節	坂田家の「筋目」と甲府町年寄	40
おわりに	49
第二章	享保期における町役人の変容——享保九年の甲斐国幕領化を事例に	55
はじめに	55
第一節	享保九年柳沢吉里の転封と町方	57
第二節	「久敷事をも覚罷在候者」	63
おわりに	73
第三章	町役人と將軍年始参上	79
はじめに	79
第一節	將軍年始参上の許可	81
第二節	江戸参上の由緒形成	87
第三節	「先格」の実像	96
第四節	安永六年の將軍年始参上	101

目次

第五節 寛政六年の変化	106
おわりに	115
第四章 幕領の町役人と江戸——江戸へ去る幕府役人	121
はじめに	121
第一節 安永六年の甲府町年寄坂田忠堯と將軍年始参上	123
第二節 甲府町年寄と江戸	128
おわりに	146
第五章 甲州騒動と「御救」	153
はじめに	153
第一節 思い起こされる天明七年の「御救」	155
第二節 甲州騒動後における甲府の「御救」	163
第三節 幕末の「御救」	174
おわりに	179

第六章 移動する将軍と町役人の将軍年始参上

はじめに

第一節 町役人はどこに行く

第二節 将軍が居る畿内

第三節 江戸に集う町役人

おわりに

終章 近世都市と町役人の家

第一節 甲府町年寄と坂田家

第二節 町役人の家

第三節 町役人の近代

第四節 都市史を拡げるために

あとがき

初出一覧

索引

左1 240 235 231 228 225 221 221 215 204 198 187 183 183